ツバサ

皐月メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ツバサ

【Ｎコード】
Ｎ６９２１Ｍ

【作者名】
皐月メイ

【あらすじ】
洗礼の日
ルキとグレンをめぐる翼の物語

はじまりの物語（前書き）

夢を見ていた。
長い長い……夢を。

まだ子供だった頃の夢。
父さんと少女が笑っている夢。
すごく懐かしくて、暖かい気持ちになる夢。

納屋の前で柵に腰かけた少女が俺を見て手を振った。
片手にシロツメクサの冠を持って。

あれは……誰だっけ？
幼なじみの……。

彼女が俺の名前を呼んだ。

「……グレン」

はじまりの物語

＞＞はじまり＜＜

聖都アスガルドに伝わる伝承にこのような記述がある。

まだ、地上に文明が栄えていた頃、何百年にも渡る内乱によって土壌は汚染され、生命を脅かすものとなってしまった。作物は実らず、水は汚染され、資源は底をついた。更に天候の不順も重なり、多くの人々は死滅していったのだ。
その惨状を憂いていた時の王、ライネルは王位を弟に譲り旅に出たという。

数人の共と出た旅の目的は古から王家に伝わっていた楽園である約束の地を探す事であった。各地を探し回って数年、北の砦を訪れたライネルはとうとう無理がたたって床に伏してしまった。高熱が続き、次第にやつれていく身体。最早、身体を起こす事すら、難儀な程に衰弱していた。

それは、吹雪の夜の事だった。何かに導かれるように家来達を休ませ、彼はひとりフラフラと寝室のテラスに出ていった。外に出てすぐに彼は異変に気付いた。

寒くない……。

彼は自分がおかしくなってしまったのかと思ったという。極寒の地の果てであるはずなのにと。彼は思わず頬をつねってみた。

「痛い」

その時空から笑い声が聞こえた。鈴のような小さく可愛らしい声。彼は声のする方を見て言葉を失った。

無理もない。ブロンドのウェーブがかった髪の少女が光に包まれて降りてきたのだから。更に少女の背中には……大きな翼が生えていたのだから。

「俺は……死ぬのか？」

思わずライネルは少女に尋ねた。少女は首を振って微笑んだ。

「私は貴方達を助けに来たのです」

「助ける？」

ライネルは眉をしかめながら訊いた。少女は彼の様子を気にしない様ににっこりと笑いながら、空を指差しながら言った。

「約束の地アスガルドに」

洗礼の日

教会の鐘が鳴る。夕方を告げる鐘。村の高台にあるその白亜の建物は夕陽を浴びて赤くそまっていた。この教会は国教であるアトレアの翼の巡礼拠点で、小さな村にしては、につかわしくない程に立派で大きい。下手をすると村よりも大きいかもしれない程を規模を誇っていた。逆に言えば、この小さな村レーテはレーテ教会から発展した村なのだ。

ひとりの少女がその教会を目指して走っている。緑色の瞳、顎のラインに切り揃えられた髪、若草色のエプロンドレスに編みあげのブーツの少女はルキ。村長の娘である。

この国では１６歳になると教会に行き、ある検査を受ける。ルキは今日、その検査を受ける様に言われていたのだ。彼女は乱れた息を整える様に門の前で深呼吸をする。何を調べる検査なのか知る人はほとんどいない。ただの通過儀礼のようなものだとみんな思っていた。もちろん彼女もだ。この検査に引っかかる人を見た事なんてなかったから。

いつも見慣れた教会がルキにはよそよそしく見えた。毎週、お祈りに来ていたはずなのに。人通りの少ない門を通り、聖堂の中に入ると正面にアトレアの像が見えた。大きな翼を持つ聖女はアトレアの翼の主であり、人を汚れた地界から天界に導いた救世主である。ルキはアトレア像の前まで行き祈りを捧げる。

「ルキさん、そういえば今日はアトレアの洗礼の日でしたね」

奥にいた司教が出てきてルキにそう話しかける。父と同じ赤い髪の

その男は柔和な笑顔を見せてルキを迎え入れた。ルキははいと小さく頷き、司教の前に行く。

「緊張する事もありませんよ。みなさんが一度は受けるものですから。……さあ、こちらに」

そう言いながら司教は微笑み、祭壇の横にある入口に誘った。ルキはまた小さく頷き、司教の後をついていく。入口を入ると薄暗い。足音が響く廊下を歩きながら、ルキは段々と不安な気持ちになってきた。

少し歩くと司教は小さな扉を開けた。ルキも早足で扉をくぐると眩しい光に一瞬目がくらみそうになる。彼女は慌てて周りを見渡した。正面の窓の西日がさすその部屋には家具などは無く、ただ一脚の椅子だけが置かれていた。白い室内は夕陽の赤に染まり、壁紙に施された薔薇や羽根のモチーフを色付かせている。

「さぁ、お座りなさい」

司教はその椅子に座るようルキに促しながら、黒いカーテンを引き部屋を暗くした。彼女は異様な雰囲気に飲まれながらも、急いで椅子に腰かけた。赤いビロードが張られた安楽椅子は心地よい。ルキはゆったりと足を伸ばしかけてから、我に返ってきちんと座り直した。司教はその様子を見て微笑み

「緊張しなくても大丈夫ですよ。すぐに終りますから」

そう言って出ようとしたが、最後に振り返った。

「あ、そうだ。ルキさん、お誕生日おめでとう」

「あ……ありがとうございます」

ルキが最後まで言い終える前に重そうな木の扉は閉まってしまった。重苦しい音の余韻が残っているような静寂が寂しく、不安にさせる。司教がいなくなった部屋でルキはひとり、居心地悪そうに椅子に座っていた。髪を直したり、辺りを見回したりしていると、再び扉が開いた。

入って来たのはクリーム色のサリーを付けた女のようだった。鋭い眼光にルキは思わず身を固くする。女は暫く様子を伺う様にルキを見つめたかと思うと、低い声で呪文のような歌を歌い始めた。不気味な抑揚のついたそれを聞いたルキは突然千切れるような背中の痛みを感じた。痛みで思わず身体を崩した時、女の指先が額に触れる。その瞬間、部屋全体を光が覆って、ルキは倒れた。

「……これは……翼人（つばさびと）の証」

薄れていく意識の中で、そう呟く女の声が響いた。

――何が起きたの？翼人ってなに？

廃虚の少年

全身の痛みを感じながら少年は目覚めた。黒い髪に赤い瞳、灰色の膝丈のズボンに肩から胸にかけて奇妙な紋様の様な刺青の少年は硬い棺の様な箱に横たわっていた。何故ここにいたのかわからないといったように辺りを見回す。

無理もない。彼が居たのは廃墟といってもいい様な古い研究所で、辺りのものは無惨にも破壊され尽くしていた。更に数人の人間の死体やおびただしい血があちこちに付着していたのだから。様子から最近のものではない。しかし……古いものでもない。

「俺は……」

何か思いだそうとすると頭が痛む。少年は頭を押さえながら、無表情にその場を後にした。

何か夢を見ていた様な気がすると少年は思った。ぼんやりとみた少女が俺の名前を呼んでいたと。名前は……そうだ。グレン。

彼はそれが自分の名前だと理解した。でもそれ以上は思い出せない。ただ、ここが自分の居場所ではないと感じていた。彼は意識する訳でも無く自然に脇にあったダガーを脇に差し、手慣れた様に扉を開けた。まるで長年過ごしていたかの様に。そして猫の様に身軽な所為で塀を飛び越えて施設を後にした。

施設の外は一面の森に囲まれていた。まるで数十年以上忘れ去られた様に。木々のざわめきしか聞こえない静寂。グレンはその中に微かに聞こえた川の音にひかれて草を歩く。キシキシときしむ小枝をかきわけ、雑草を踏みしめて。音に驚く鳥達が一斉に飛び立った。暫く歩くと小さな草原が広がっていた。先ほどから聞こえてきたせ

せらぎの小川もある。グレンは草原に生えていた草を摘むと腰を降ろして草笛を吹いた。何となくしっくりときたのは、おそらくは記憶に因るものなのだろうとグレンは思う。しかし、過去に想いを馳ようとした途端にまた頭痛に襲われた。

「俺は……一体……」

誰なのだろうか。そんな事を思いながら、膝を掴む。その時、森から獣の奇声が聞こえてきた。グレンはとっさに立ち上がり、身構えた。

魔物？

守らないと……倒さなければ。

……守る？

誰をだ。

グレンは声の聞こえる方をキッと睨みつけて片手を前に出した。頭で考える訳でもなく無意識の行為。

彼は呪文を口にした。

「う……ぐっ……」

唱えた途端に背中に激痛が走る。見ると肩にあった刺青が青く光っていた。

「これは……一体」

グレンは力を吸われた様に崩れた。身体が全く動かない。

「守らないと」

そう言って彼はそのまま気絶した。

意識を失っていた間、グレンは夢を見ていた。それは恐ろしい夢。燃え盛る村、響き渡る悲鳴。グレンは誰かに手を引かれて山道を逃げていた。背中が燃える様に熱い。

これは……いつも遊んでいたツリーハウスに行く道？

そんな事を思いながら歩いていたような気がする。険しい山道を越えてツリーハウスの前に来た時、目の前に何人もの男が現れた。

「おじいちゃん……？」

「すまんな。お前の為なんだよ」

悲しそうなおじいちゃんの言葉を聞いた後からグレンの記憶はない。

暴走したのか？

まさか我が一族に破滅の黒が現れるなんて――――

奴らに見つかる前に封印しなければ……。

そんな誰かの話し声をグレンは最後に聞いた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6921m/

ツバサ

2010年10月15日22時31分発行